## いわきの二つの避難所に300人分の夕食を届けに行きました 「駒込・千駄木 光源寺隊」仮称 第1便 H23・4・22 島田冨士子





平工業高校避難所の支援物資は、体育館のかなり の面積に山積みでした。右上は入り口近くのコー ナーにいつでも食べられるように置かれた食品。

四倉の港にて。道の駅が初めて再開された4月22日、並べられたのはほんの少しの野菜と、引き取り手を待つ善意のランドセルでした。



★食事が行き渡ってないという、いわき市の状況を耳にしてとても心配でした。津波の災害以外に、すべての流れが止まってしまう、「人災」の予測がつきましたが、現地がどんなシステムで動いているのか分かりませんでした。大塚モスクの方々の車に、物資やおにぎりで参加させていただいていますが、すでに震災から40日。そんなときに、山崎隊長から報告がありました。「文京区の社会福祉協議会の関係団体で、『響きの森』というボランティア団体があり、そこの加藤良彦さんがいわき市の平工業高校に常駐して活躍しています」と。山崎さんのお知り合いを訪ねることで、現地入りの機会を得ました。加藤さんは見ず知らずの私に、電話で開口一番、「食べ物持ってきて! ごはんだけでおかずがないのよ! 600人分、よろしくね」でした。「無理です。その半分、300人分を持っていきます。魚が食べたいんじゃないかしら」と伺うと、「魚なんか出たら泣いちゃうか、大拍手だね。あと野菜。野菜、野菜」とのことでした。野菜を連呼され、そうか、たいへんなことが起きているらしいと察しがつきました。

★焼き魚は、文京区真砂町市場の魚寅さんに塩さばを100切れ、豊島区中央通り商店街の魚濱さんに さわらのたれ焼き100切れ、いわき市の料亭・正月荘に塩さけ100切れを、すべて一切れ100円 でお願いできました。気持ちよく応じてくださり、感謝しました。早朝焼いていただき、ピックアップし ながら常磐道を走りました。。。 ★炊き出しの目的は 日常的なおかずを避難所に届けて日常の生活を一瞬でも思い出していただく こと。40日たち、避難所は殺伐として、善意の食事はカレーやどんぶり飯、豚汁といったヘビーな食事 が炊き出されています。もう一つの目的は複数の避難所を回ること。震災から40日余り経つのに依然

食事が行き渡っていない、いわき市の状況、できれば 問題点のいくつかを知るためでした。



江名小学校にて。舞台の上もぎっしりと積 まれた物資の箱。左に立つ区長さん(町会 長のような方)が自ら陣頭指揮し、人間関 係にも混乱が感じられなかった。

藤間小学校にて。毛布は4月中旬から多くの避 難所で過剰供給になった。支援物資として毛布 と衣類を大量に送る方がまだいて、平競輪場の 倉庫は満杯。でも提供の過剰も止められない。

★行政の支援食とは。いわき市は各所の保健センターで温めた「トロ箱に入りのパックのご飯」と「翌 朝用の菓子パン」しか配りません。他に支援食があります。行政の支援食は、カップめん、インスタントみ そ汁、レトルトのカレー、煮豆、佃煮、ふりかけ梅干、さばやツナ缶、ミネラルウオーター、野菜ジュース、 スポーツドリンク、ウィダーインゼリー、ペットのお茶といったものです。人数分以上届きます。初めて訪 問した4ヶ所の避難所とも、これらの物資が人の丈以上に山積みでした。自由にとれるように看板をつ けている物も多くありました。いずれも、おかずではありませんでした。こうした食事で40日がたちま す。

いわき市の職員がパソコンを通じて、避難所の在庫と欠品を連絡して補充していました。

★**支援物資は満杯**でした。毛布は1人3~5枚は使われ、マットも人数分。布団は半数ぐらいに行き 渡っています。ダンボール箱に布団をかけて、コタツのように家族が輪になって入り、外見は団欒のよう にも。衣類はサイズ別にボランティアが分類し、自由にもらえ、山積み。下着も山積み。スポーツシューズ も山積み。特に平工業高校は市の中心街で支援団体の立ち寄りが多いため、ありとあらゆる物資が避難 所の一角のかなりの広さを占めていました。「この物資、使い切れないよな」と現地で加藤良彦さんがぼ やいていました。支援物資は受け取った避難所の所有物です。他の避難所や自宅避難者に渡すことは厳 禁て

後能しづらい問題を記します。



津波で亡くなった友人の 通夜が昨晩あり、そのお斎 のご馳走を「食べてくださ い」と勧めてくださった方。 いわき中、あちこ ちで葬儀 をしているのを見かける。 喪服を貸し借りしながら、 列席する。

避難所に福島民報と郵便 物が届く箱。



## 2011**震災支援 千駄木・駒込・光源寺隊** 仮称 いわき市の平工業高校避難所 第1便と いわき市の四ツ倉高校避難所 途中から分かれた第2便

いわきの支援状況についてのご報告

H23年4月23日~24日島田冨士子

**参加者** 石塚理子さん(いわき市出身・ほおずき市の「万福食堂」衛生指導・管理栄養士)渡辺君子さん(田村市で幼少を過ごす・保育園給食補助員・ほおずき市で「焼き鳥屋」参加 ) 島田富士子(光源寺)

運転者と車 渡辺君子さん 足立区の水谷守男さんから借用のハイエース 1 台

支援物資 キャベツ10個 調味料

炊き出し 第1便は平工業高校避難所に150人分 分かれて第2便は四ツ倉高校避難所に150

人分



海沿いを走る国道6号、豊間付近。高台の家も 津波が通り抜け、基礎の部分に流れ着いた瓦礫が 詰まっている。家の中のゴミとなった生活道具を 取り出さないと、家は解体できない。



国道6号線の上の瓦礫を左右に寄せて道を確保。捨て場も決まらず、40日でここまでになった

- ★民間からの炊き出しの申し込みは、各避難所の担当者が受け付けます。今回の第一便・平工業高校(避難者150人)は、ボランティアの仕切り役の加藤さんに電話で了解をとりました。第2便・四ツ倉高校はやはりボランティアの仕切り役の本柳さんです。多くの避難所がこのシステムです。しかし、四ツ倉の場合はそれに加えて、四ツ倉支所が先に了承していることが条件です。せっかく炊き出しに行ったのに、先に行った自衛隊が配食していたり、他の団体とダブルブッキングされて、配食先を探しに巡回し、タイムアウトで持ち帰れない状況も報告されています。なぜこんなシステムなのか。地域で一体化して、本部体制が作れないのか、もどかしい状況です。
- ★「**行政の役割**」がこのもどかしい混乱の原因でした。もともと行政は、憲法で保障する最低限の生活

保障をもとに働きます。避難所に可能な人数を収容し、決められた品目の支援食を配り、毛布や暖房などの災害物資を配ります。避難所から出る人の数や、住宅の斡旋もします。しかし、炊き出しの受付、避難所を快適に過ごす環境づくり、支援食の準備と配食、民間の救援隊からの物資の管理は

ボランティアの仕事です。行政の仕事の項目には入っていないのです。ボランティアは人が変わることも多く、避難者は出て行く人もいて、かじ取り役を失うと命をつなぐ善意の炊き出しを食べることも、ままならなくなります。行政の職員はもともと、「まとめ役ではない」と認識することが大切でした。

★避難所のまとめ役は全国の「社会福祉協議会」がしているとされていますが、姿はありませんでした。 一つの避難所に、福島県職員2名、いわき市職員2名、自治労さん2名(災害協定している県が職員を派遣)が配置されています。24時間、2交代で勤務し、毎日違う人が勤務します。自治労さんだけは、2日交代で外泊し、2週間連続して避難所にいます。ガードマン的なことを担当しています。「子どもは何人いますか。」とか「この次の炊き出しはいつが入っていますか」と伺っても、「今日来たばかりで」と、県、市のどの職員も答えられませんでした。

★避難所には格差が相当あります。草野小学校(55人)、藤間中学(57人)、勿来公民館(50人)などの少規模の避難所は後回しになりがちで、物資が届かないところもあります。また、大規模な避難所では、素晴らしい体験をしました。平工業高校避難所の加藤さんと江名小学校の自治会の区長さんです。どちらも声が朗々として大きく、にこやかで、こまめに働き、どっしりと構えた方でした。この二つの避難所に共通するのは、炊き出しの立ち寄りがほとんど毎日入ること。民間の支援物資が大変豊富なこと。避難所が整然としていて和やかな空気でした。それに、煮炊きの場所を確保して、自分たち避難者が全員のおかずを作っていました。感じのいい、責任感のある人の所ならダブルブッキングもなく、安心して炊き出しに出かけられます。喜んで、表情豊かに受け取ってもらえます。こんな基本的な人間関係に差が現れていました。また、道路事情がよく、分かりやすい場所は民間の炊き出しがや物資が頻繁に立ち寄ります。物資があり余る平工業高校と藤間中学は車で15分の距離です。けれど、藤間中学避難所は物資が乏しく、自衛隊が2日に一回御用聞きに来てカップめんなどの支援物資を補充し、自衛隊が炊き出しを頻繁にしていました。



江名主学校では体育館のすぐ外に、手作りの厨房があった。人が頻繁に出入りし、支度の活気が感じられる。



平工業高校避難所は体育館のひさしの下に、屋外の煮炊きの場所を独自に準備している。

★自炊道具は必需品です。「温かいものが食べたかった」とたくさんの方に言われました。気仙沼、石巻、宮古、多くの市では早い時期に炊事場が作られました。鍋やコンロの炊事道具が配られました。避難者が担当を決めて簡単な食事を作り、民間の炊き出しが時々入って、食事作りが楽になります。いわき市

は全く違います。アリオス避難所(130人)は隣が公園ですが、公園は煮炊き禁止の場所という理由で炊事できません。四ツ倉高校は調理室を開放すると「建て物全体の戸締まりが出来なくなる」という理由で煮炊きできません。平体育館避難所(120人)と湯本高校避難所(130人)も煮炊きできません。善意の炊き出しがない日は毎日、「パックのご飯と菓子パンとカップめん」です。平工業高校は例外です。合宿施設が単独の棟で建ち、その厨房で文京区の常駐のボランティア(調理師)が煮炊きをしていました。自治会の区長さんが仕切る江名小学校避難所では、校庭の片隅にテントを建てて厨房を独自に作っていました。人々の活気が感じられました。

★民間の炊き出しはこんな事情からまだまだ必用です。50人から150人の数量を届けられる団体は、都内でもそう多くは存在しないでしょう。活動団体は現在の活動を休止してまで「救援活動」をするわけにはいかず、募金での支援が多いです。また、福島県は津波被害が少なく、沿岸部のみのため、災害NPOは被害が甚大な気仙沼、石巻方面へと通過していきまます。私もいくつものNPOに当たりましたが、「いわきは被害が比較的軽少」との判断で、支援してもらえませんでした。

★ボランティアや地元自治会の横の連携は、この40日間全くありませんでした。私たちが加藤良彦さんに出会った夕方、初めて四ツ倉高校避難所から仕切り役の本柳さんがやってきました。加藤さんの紹介で私が同乗し、第2便として四ツ倉へ出発しました。加藤さんが巣鴨のドコモから無料の携帯を借りてきたものを本柳さんに渡し、これで四ツ倉の避難所の人たちは携帯がかけられるようになりました。また、地元の婦人会が夕食の配食をお手伝いするという情景は全くありませんでした。いわき出身者の複数の発言をまとめると、沿岸部の漁師町と内陸部の都市は日ごろ、あまり交流がないとのこと。そもそも、助け合いの活動団体や趣味の倶楽部が活発でなく、ばらばらな土地柄とのことです。それでも親戚や身内でやっていける豊かな風土とのこと。雪が積もらないことも影響しているとのことです。



平工業高校避難所。過剰なほどの物資に囲まれて雑然と暮らす避難者が多い。意識的に体を動かさないと、血栓が出来やすい。

★学校を避難所にする問題点。多くは学校の体育館を避難所にしています。当初は短期の見通しだったのでしょう。新学期を向かえて、被災地の小学校の子どもたちはバスで集団通学が開始され、受け入れた学校では教室が足りません。「ここは子どもたちの場所だから早くあけねばねぇ」とのやさしい言葉が避難者の多くから聞かれました。どの避難所でもいわき市の職員は、「5月初旬に多くの避難所が閉鎖します。残りの人を統合します」といいますが、あと10日余りで実現できるとは到底思えませんでした。また、いわき市の課長さんと話す機会がありました。正直な方で、「県営と市営住宅を斡旋するんだけど、職員が部屋を実際に見せないんです。図面だけで斡旋するから、行ってみたら駄目というのが多いです。お年寄りをエレベーターのない4階に斡旋したり、車がない人に山村の空家を斡旋したりで、ミ

スマッチが多いです」とのこと。県は斡旋住宅に入る人に「家電6点セット」が支給します。その配布が遅れているので、「なにもないところには住めない」と避難所にいる人も多いです。

★まだ一**戸建ての住宅に住む方**とは会えませんでした。本柳さんの話では、四ツ倉の住宅地では地震と放射能を避けて多くの方が県外に出てしまい、所々の家に人が住んでいるとのこと。泥棒が横行し、昼間も安心して出歩けなくなったそうです。脱出しなかった多くは、女性と老人の家族、身障者の家族がいる方とのことでした。

 $\stackrel{\wedge}{\boxtimes}$ 

以上の事情から、いわき市北部の四ツ倉は原発から32Kの場所でもあり、民間の炊き出しがほとんど立ち寄らず、炊事設備がないため、炊き出しの支援をする必要を感じました。

 $\stackrel{\wedge}{\mathbb{A}}$ 

前日夜 18:00 みんなで野菜を切ったり、味噌を溶いたり。明日の煮物の準備。

- 7:00 地域の方々が早朝から、光源寺境内で煮物。手際よく150人分。
- 9:20 光源寺出発。魚寅さん、魚濱さんで焼き魚を受け取り、常磐道へ。
- 11:30 中郷 SA で昼食。メヒカリのから揚げ定食、アンコウのから揚げ丼、ともに 600円。サービスエリアのおばちゃんが「地震前の冷凍品だから安心よ」と。
- 14:30 いわき市内のJAグリーンプラザで、「いわきマルシェ」の販売品を買う。葉物野菜は全くない。名産のとっくり芋、長久保の漬物など4万円余り購入。
- 15:30 平工業高校避難所に到着。合宿所の厨房をお借りしてみそ汁の調理を開始。 石塚さん、渡辺さんの手際のよさにボランティアの人が覗きに来ては感嘆。
- 16:00 四ツ倉から本柳さんが食事を受け取りに来て、涙ながらにこれまでの避難所のまとめ役 のつらさを語る。精神的にも支援がなく限界の様子。
- 17:00 平工業高校の配食は、石塚、渡辺チームにお任せして、島田は四ツ倉高校避難所に到着。乗車時間約30分。熊谷乃理子さん(いわき市出身)と高校同級生の円谷優子さん、稲葉広直さん、それにあと1人も同行していただき配食の援軍は4人を得た。有難い。
- 17:30 若い元気なお母さん4人が配膳役に立ってくださる。有難いと思った瞬間、数人が器を手に並び、あちから、こちから手が出て、メニューを説明したり準備を話し合うどころではない。足元でクーラーが開けられ、手で煮物をつかんでは配る人、足元から、みそ汁をお椀ですくってこぼしながら配る人。「作った人に悪いけど、煮物の汁はふとんを汚すから要らないの」と煮物を絞っている。一同あっけにとられているうちに、いろいろ運ばれて終了。一歩も出てこずに、配られるのを待っている習慣の人が大半だった。
- 20:00 一同、唖然。熊谷さんが「配膳、失敗しましたね~」と。震災40日後、初めての魚料理、根菜の煮しめ、さっぱりしたねぎと豆腐のみそ汁だった。うまかった、うまかったと言われ、一息。 恥ずかしそうに、「こういうの食べてたんです」と家族で囲んで召し上がっていたお父さんに、 後ろ向いたまま言われた。なぜか、ほとんどの人が目を合わせず、こちらも引けてスッ、スッと 退場した。
- 21:00 正月荘に100切れ分を払いに。石塚さんがJAの叔父さんに米を90K交渉。格安。円谷さんがいわきの銘酒「久米」(きゅうべい)をケースで買ってきてくださる。これらは「いわきマルシェ」として、4月30日と5月3日に「一箱古本市」での売り物。炊き出しの帰りの車に積んで帰り、宅配料を稼ぐ。相当大きな酒屋さんで買ったらしいが、酒ビンは地震ですべて壊れ、

1升ビンは9本しか残らなかったとか。悪いので7本を購入してもらった。

22:00 平工業高校の厨房で洗い物を終える。ハイエースに潜り込み、3人で車中泊。

翌日

- 7:00 明け方から人の声が賑やか。車で自宅跡の片付けに向かう人があわただしく出かけていく。 平工業高校は文京区からのボランティアの手で、入り口のカウンターに、みそ汁と御飯を用意 してある。自由に取って食べられる。
- 8:00 加藤さんは大変忙しそう。「これはどうするの」と、パソコン操作から昼のご飯のおかずまで相談が絶えない。大量にある支援物資にも頭を悩ませる。避難所の「暮らしの管理人」であった。みかん箱が並んでいるコーナーでは、「福島新報」と避難所気付の郵便物が、7班に分けて配布されていた。7つの班の班長会議が1日おきに行われる。「ここまでいくのに1月かかった」と加藤さん。
- 10:00 藤間中学校避難所に。昼間なので子どもを含む13人しかいない。市の職員は若い保母さん2名で少し頼りない。「物資は自衛隊が3日に一回足りないものを聞きに来るので、十分です食べ物も自衛隊が炊き出しに来ます」と。

厨房があるというので見に行くと、雑然としてほとんど使われていないことが判明。「パックの 御飯を温めます」とのこと。

22日の食事を調べてもらう。夕方=魚の缶詰・野菜ジュース・パン(要請したのであとでご飯が届く) 次の朝=パックの粥・カップめん・缶詰。その前の日の夕方=パックを温めたご飯が届く・パックの角煮・ジュース・パックの煮豆 以上。

「市から自分たちで煮炊きをやってください。とは言えない」「今後も自立支援は呼びかけないです。 私たちの仕事ではないです」、「二つの小学校で使い、これから学校が始まるので、早くここを返さ なくてはなりません」と保母さんの言。

- 11:00 再び昨日の四ツ倉高校へ、今度は3人で。お年寄りが集められている「武道館」(40名) は畳敷き。温かいがどことなく活気がない。手のない方、足を引きずる方も数人いて、木村さんというおば様が1人で40人の食事の世話をしている。避難者の1人だが、とても世話焼きでお元気。昨日の私たちのみそ汁の残りが鍋に入っていた。みな、彼女にすべてをしてもらう仕組みで、少しも動かない。ボーっとして横になっている人ばかり。体育館(110名)は子どもが騒がしい。昨日の配膳してくださったヤンキーな茶髪のお母さん、由美さんから声がかかる。「昨日はおいしかった」と。「今度は焼肉とか、ハンバーグも全然食べてないので。とんかつもいい」。少し返答に窮した。この朝、日赤の200人鍋が届き、初めて煮炊きが出来るようになった。衣料会社のボランティアが牛丼を作っていた。
- 12:00 四ツ倉港へ。船が陸に上がり、港の倉庫はゴミがぶらさがる。津波が通り抜けた跡は、板壁がなく、隣も、隣も、1階部分がまっすぐに見通せる。道の駅が週末再開された初日だった。大根20本、トマト50個。などなどすべてを買い取って、避難所に届けてもらった。電話すると本柳さんが興奮状態で恐縮していた。
- 13:30 海岸線を塩屋崎までたどる。凄まじい津波の跡。軒にビニールがからまり、海から陸へと3 軒の家を通り抜けて、も抜けのから。竹林がまっ茶色に枯れて塩水がかぶった痕跡。海沿いの15号線は左右に木材と瓦礫の山、また山。新舞子浜の共済病院は1階部分を津波が通過。閉鎖されていた。14:00江名小学校避難所(150人)へ。打ちっぱなしのコンクリートと近代的なデザインのすばらしい建物の学校。総じていわき市の学校は設備と規模に圧倒される。原発の補助金なのだろうか。こ

の小学校は、津波で流された永崎小学校と合同で使われ、生徒が2560人になる。

自治会の区長さんが炊き出しの受付や、マスコミの案内や、堂々とこまめに働いている。炊き出しは毎日欠かさずに入っていて、大塚モスクの方々を絶賛。「モスクの方のカレーはおいしいです。このフルーツは彼らが皮を剥いていってくれたものです。見てください。一番最初に私たちに来てくれたのは彼らです。感謝してますよ~」。よかった。

校庭の片隅にテントがあり、自炊の厨房施設が作られていて、人が頻繁に出入りしていた。夕食の準備らしい。

- 15:00 「鮮場」(魚のマーケット)で「いわきマルシェ」の商品を買い物。鮮魚は海道産と千葉以南のもの。「福島の水揚げは禁止だから安心して」と市場のおじさん。
- 15:30 「もりたか屋」へ。いわき駅の近く、目抜き通りの洋品店が独自に救援物資を無料配布。これから、このスタイルが住宅地に普及することを願う。店主の会田さんとホームレスが出ることを心配する。



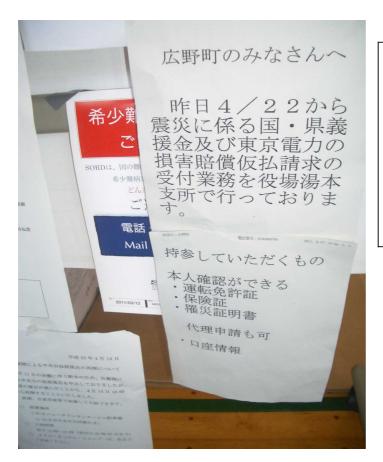
いわき駅の繁華街にある洋品屋「もりたかや」では、支援物資を自由に持って帰れるように、店の一部を開放していた。たった1軒で、勇気ある支援だ。近くの芸術文化会館「アリオス」の避難者がもらいに来ることが多い。

16:00 芸術文化会館「アリオス」へ。島田が1人で見に行く。廊下は消灯され、劇場の誘導灯に照らされて、ふかふかの絨毯にダンボールハウス。ずらっ~と。優雅な木目手すりの下も座り込んで話し合う人、横になって毛布にくるまる家族、人、人。すでに、ホームレスの匂いが漂う。劇場の中は豪華な照明器具だらけのため余震により落下が心配されていて、立ち入り禁止だった。煮炊きはできず、廊下ばかりで、まとまって人が何かをするような空間もない。自衛隊と民間の炊き出しがたまに入っていた。今回、一番のショックはこのアリオスだった、災害ではなく、行政が手を差し伸べないことの、「人災」が起きていた。





22:00 無事、光源寺着。荷おろしの後、渡辺さんは運転を継続して、足立区まで車を返却に行って くださった。



藤間中学校避難所で見かけた張り紙。広野町の方は原発から強制的に避難し、さらに、海沿いの避難所から2度の集団移転を経て、藤間にいる。藤間から湯本支所へは大変遠い。 本人確認できる証明書を持参し、東京電力の損害賠償請の仮払いの手続きをしに出かける。精神的な業癌が供う

かける。精神的な苦痛が伴う。